毎日俳壇

井上　康明　選

缶蹴りの子ら神隠し秋の暮
川越市　益子さとし

△評▽秋の夕暮れの寂しさが、神隠しの錯覚を生じさせる。缶蹴りの子供たちが一斉に姿を消し、あたりは一瞬の静寂に包まれる。

欠航のアナウンス聞く初嵐
相模原市　はやし　央

△評▽離島航路だろうか、その年初めての秋の強風が就航を妨げた。初の一語に、驚きとはなやぎ。

新涼やテレビ講座のスペイン語
周南市　九内　千沙

秋暑し恐竜展の長き列
浜松市　久野　茂樹

決勝打高き金属音の夏
伊丹市　噂野アンドゥー

風鈴の駅の向かうは水平線
相模原市　小山　鞠子

終戦日朝から鳥の声あふる
鴨川市　西宮　鉄雄

秋蟬の声しきりなり許六の忌
彦根市　水野　隆雄

朝顔の白さよ指の切れさうな
東京　望月　清彦

誰よりも母に見せたき兜虫
宮崎市　境　雅子

片山由美子　選

入院の日も朝顔に水をやり
東久留米市　矢作　輝

△評▽入院をしなければならない身でありながら、朝顔のことを気にかけている。明日からは家族が水をやってくれるだろうか。

あした咲くあさがほ折目正しうす
大阪市　隠樹ノリエ

△評▽固く巻かれていたつぼみがほぐれかけたところを、折り目を正していると見たおもしろさ。

和歌浦のプールサイドに海を見て
和歌山　馬谷富貴子

漁火を見てゐる二階夜の秋
米子市　岩水　節子

窯元に積まるる薪や初時雨
龍ケ崎市　小宮　光司

水練の伊勢の宿より来る葉書
尼崎市　森下久美子

門口の雑草抜くも盆用意
さいたま市　金井　裕子

白き紙白きままにて秋に入る
直方市　岩野　伸子

おとうとの敵討つ姉草相撲
北九州市　篠原　敬祐

蟬時雨たぎる地球に喘ぐごと
国立市　佐藤　建

小川　軽舟　選

秋暑し草に溺るる家一つ
龍ケ崎市　本谷　英基

△評▽空き家になったまま放置されているのか。草が茂るにまかせて秋になった。助けを求める家の叫びが聞こえそうだ。

墓参代行証拠の動画送りつつ
紀の川市　中島　走吟

△評▽なんとも味気ない世相を描いた。それでも墓を忘れていないだけまだましなのだろう。

西日濃し並んで唸る室外機
東京　木内百合子

流灯のゆく手の闇の濃かりけり
横浜市　宮崎　一風

爽やかに羽を負ひたり白孔雀
浜松市　野畑　明子

薄明とともに消えなむ白鳥座
延岡市　九鬼　勉

コーラふたつプールサイドの片陰に
京都市　古川麻美子

午下がり蟬鳴かずして空白し
西宮市　貴　春日

敬老日かつての企業戦士たち
桜井市　山本　椋士

蛍飛ぶ手のひらにきてまた離れ
藤井寺市　糀谷はなよ

西村　和子　選

立山の絵をリビングに避暑気分
志木市　谷村　康志

△評▽写真ではなく絵である点に、作者のセンスがしのばれる。毎朝、窓から立山を眺めるように涼をもらっているのだろう。

遠花火別れ話は曖昧に
姶良市　井之川健児

△評▽音なく消える花火と、別れの言葉も交わさずに離れた間柄とが、かなしく響きあう。

秋立つやあはれあはれと蟬の声
羽生市　岡村　実

牛小屋の一頭ごとに扇風機
那須塩原市　森島　元一

どよめきや点火一気の大文字
伊勢市　古野　政木

大道のピエロの手品汗が飛ぶ
長野市　宮沢　信博

新涼や触れて冷たき花鋏
長浜市　中島　正則

烏瓜花の縺るる風溜り
横浜市　相沢恵美子

藍染の暖簾をよぎる秋茜
名古屋市　可知　豊親

星仰ぐジャングルジムの夜涼かな
名古屋市　山内　三雑

調べの鼓動

俳句甲子園

星野高士

全国各地から32チームが集い、今年も俳都・松山で第28回「俳句甲子園」が熱戦を繰り広げた。地方大会を勝ち抜いたチームに加え、投句審査による選出チームも加わる多彩な顔ぶれが予選リーグに臨んだ。

今年の題は「青田」「心太」「天牛」といった複数の兼題であり、名句を披露したうえで互いの句について議論を交わし、我々審査員が作品とディベートを評価して勝敗を決めるのである。

予選は大街道商店街の端から端まで使い精緻な句とディベートを両立させる姿が光っていた。私は第10回から連続して審査員を務めているので毎年毎年違った俳句や精度の高い議論をみてきた。1年ごとに違うが、こちらは温暖化の暑さ、残暑との闘いもあるのだ。

しかし素晴らしい俳句や議論に合うと、そんなことは忘れてしまうのである。

そしてこうした丁寧な言葉の選び方と解釈の深さに俳句の奥深さと高校生の感受性を思うのであった。

決勝リーグは洛南(京都)、星野A(埼玉)、横浜翠嵐、名古屋B、山形東、高崎が名を連ね、見事に初優勝したのは横浜翠嵐だった。個人の句にも光が当たり、学習院女子高等科の本間まどかさんの△天に地に鶺鴒の尾の触れずあり▽が最優秀句に選ばれた。

ちなみに私の選んだ優秀賞は横浜翠嵐の△家系図に知らぬ百人秋簾▽。読み込みの題が「百」であった。全国から集まった俳句を通じた真剣勝負はまさに文化の学びの場でもあった。

(ほしの・たかし＝俳人)